

天然物漁業

河川敷を里水辺に仕立てる
河川の川袋、湾処（ワンド、半閉鎖化して流れない水域）等で自然観察 し、養殖でなく自然環境整備で増殖を促進
どじょう、なまず、うなぎ、鮎等
期待 とくにうなぎの遡上を実現させる
サッカークラブの活動として、また近隣学校の自然観察学習としても実施
高校生から小学生までが一緒に活動する機会とする
たまたまこの計画想定地域の河川には広い河川敷の一部に上流域にも下流域にも湾処がありそれぞれを比較観察することができる
湾処が希少生物種の生息地として注目され人工的な整備もされているところもある
ここでも湾処整備して河川環境の保全、改善を通じて天然物淡水漁を地場蛋白食材資源としても活用できるように目標を立て地域のSDGs活動としたい

食 魚類(海洋)

頓挫している大型浮体式洋上風力を原発立地地域沖合に展開(高圧送電線接続可能)
浮体装置を大型ドーナツ状円形にしてそのサークル内で流れ藻を培養
稚魚育成基地にする

海洋温度差発電で深層海水を汲み上げ、栄養塩類が豊富な深層海水を利用して漁業資源の回復を図る

日本近海の漁業資源保護がうまくいっていない現状と、世界的に海洋のプラスチックごみ汚染が深刻化している現在、海洋漁の養殖漁業も選択肢の一つかも知れない
無理して太らせる等せず、養殖密度も上げず、自然な餌を与え、十分な技術管理ができるなら陸域で人工海水を使った海洋漁養殖も考えられる

海洋資源環境整備:例えばしゃこ(かつては江戸前寿司ネタとしても多用された)の生育環境を調査研究、半自然な場で養殖に近い増殖を図る

食 その他

昆虫食等の可能性が検討されているが、直接食べるより飼料用を先行開発
応用先は主に鶏肉の餌にする
河川敷や耕作放棄地等を利用した自然系飼料開発を行う(上述)
ダンゴムシを培養して良質土壌形成に活用する

調理

都市ガスは不使用
調理加熱には改善開発の余地がある
IH レンジ、電子レンジ、オープン、炊飯器等の特定目的電気調理器等が併用されているが、既存の形態にとらわれない新調理技術を開発
これまでの調理器は過剰加熱で肉が硬くなり、水分が蒸発して焦げついたり(焦げはがんのもとになる)、加熱調整が難しかったが、例えば40℃低温肉加熱等、弱火調整をしやすい機器にしたい
ヒートポンプ調理も可能性がある
例えばケミカルヒートポンプで揚げ物
高度な温度管理、油の音を分析して加熱状態を判断
しかし全自動にせず感覚火加減できるようなものもよい

食品製造への参加

農業参加だけでなく自家栽培した大豆を使って製造する豆腐屋に手伝いに行く、小麦供給先のパン屋に手伝いに行く、醤油醸造元に見学に行く等、住民達が随時製造元に出入りして生産現場に関与してよい
菓子類は自作小麦で自給も可能
これが新百姓の生き方

食の安全 生活実験

ネオニコチノイド、旧モンサントのラウンドアップなど農薬の危険性、健康障害が指摘されている
多種多様な食品に農薬成分が含まれており、動物実験でNOAEL(無毒性作用量)以下の微量投与でも発症するという
一部の研究によると最近の子供の精神障害多発等、農薬毒性の健康影響が原因ではないかとされている
このような健康障害を回避するため、残留農薬含有食品の不摂取と無農薬栽培食品の摂取を徹底して食の安全を追求、一般の人と健康状態がどう異なるか生活実験する
とくに乳幼児あるいは胎児の段階から農薬摂取をしないで育つ人が大人になった時に検証される
これをこの住区住民等で、またサッカークラブを通じて多数で生活実証実験する

農業水利と洪水対策 (淡水漁の欄で先述)

サッカー場隣接の地下湧水貯水槽が水源
農地の上流側と下流側の養魚池で農業用水を調整
これらの池は洪水時には遊水池として機能させ、下流の鉄道線路の浸水防止も図る

PVC 余剰電力を使い、各池の水位調整と農業用水路に水供給する
余剰農業用水は西側にある小河川へ放流する

衣食住のあり方

衣服: 暖冷房以前に夏は素材は麻、織り方は絹、紗のような日本の季節に応じた天然素材繊維の良さを見直し、布を安易に廃棄物にしない使いまわしを工夫する
蚕、山繭、絹織物を復興する
フェアトレード綿製品使用により後発途上国地域発展に貢献する

医療: 現在の医療哲学を完全に再検討し、治療や手術より予防に重点、医薬品依存を最低限に留め体内の自己回復力を活かした健康維持方法を追求する
医と食の関係、腸内細菌の働き等の知見を活かし旧常識にとらわれない柔軟な発想で健康維持に取り組む
これらの活動を多数の市民参加で社会実験的にを行い効果を実証する

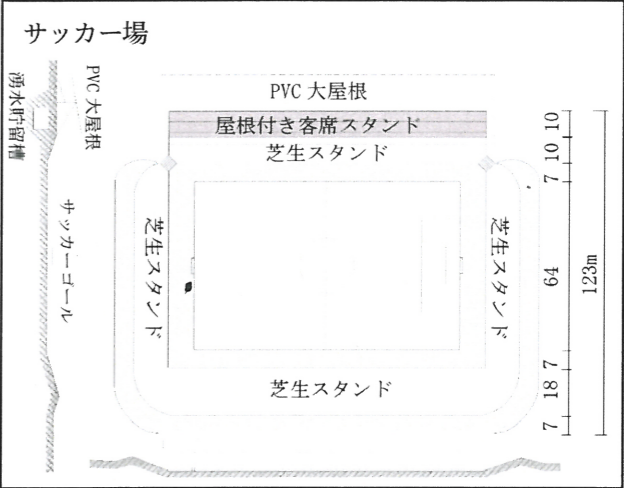
サッカー場と地域チーム

新しい意味付けをしたサッカークラブ創設

サッカークラブが単にプロ選手の試合運営だけでなく、青少年の全人格的教育等の社会的な意義も視野に入れた運営を行っていることが多い
ここでは年齢を問わず地域の人々の健康と健全な生活を併せて目的としたサッカークラブを創設し、食の自分事化、食の安全確保、建てるの自分事化、新百姓への柔軟な働き方移行推進にもつながる活動の推進等にサッカークラブが大きな貢献を行うものとする
新農本主義の農作業参加者の会員登録や自然栽培農作物の販路確保、試合交流を通じて他地域、特に遠隔地との交流等、多数参加者との接点、窓口をこのクラブが担うことで地域住民の社会連携強化を円滑に進めるねらいをもたせる

サッカークラブ主導の活動として、小学生から二十代まで次世代人格涵養、サッカー試合遠征を機会に他地域訪問し、農作業体験、自然観察等を行い、地域間交流等を促進する
また健康管理、安全な食の知識や実地体験の機会をつくり、近隣住民

への浸透を図る
こうした活動を通じて近隣住民間の連携を強化し、町内会の活動の活性化を図り、地域防災力強化、伝統文化継承にもつなげる
この計画地から20km圏内に多くの人口を擁する都市域があり、組織を支える支持者を得られるものとする



地域サッカーチームと掘割式サッカー場

地域サッカーチームのホームとして掘込サッカーグラウンド新設
洪水時遊水池として兼用
場所は盛土住宅地の近く
グラウンド付設の地下遊水槽とこの遊水池で居住地区の洪水浸水を防止する役割を持たせる

運動場面 地面高さ -3m 面積 10000m2

応援スタンド下部はGL以下、芝生面

スタンド上部は木造 座席4列 720席 椅子は杉材製 屋根付で雨天時応援できる、南を背に向けた向きに配置し、応援時にまぶしくなく、紫外線が当たらないので木材の痛みも少ない

南側主スタンド屋根面にPVC設置 (3600m2、720kw、今回計画住戸屋根の72戸分相当)

さらにその外側に洪水時貯水ピット 底面高-5mを掘削
運動場面の雨水排水処理にも使う

ここからポンプ排水して上(かみ)養魚池に送水

発生土砂量 土砂30000m3

一般土砂は盛土材と住居移転地区農地整備に使用
砂利は△断面炭素繊維網袋に詰めて土壁裏側基礎に粘土質土は焼成煉瓦原料に使用

「建てる」の自分事化-建本主義

働き方改革-半農半Xを超えて

『住宅は買う物ではない建てるもの』

新しい働き方-半農半Xを超えて-自分達で「建てる」-建本主義へ

街の職場に通勤して労働、自宅は家族と過ごす余暇の場所、と言った被雇用者の二分関係を脱し、「食べる」と「建てる」は自分達で行う新しい時代へ先導する
食に関して野菜等の栽培と味噌作りに直接参加するだけでなく、「建てる」住宅建設に関しても各種の職人仕事に参加する
江戸時代中期の社会思想家・安藤昌益(1703-1762)は為政者も含め全員農耕作業参加を基本にする「農本主義」を提唱し利益追求の商取引を批判したが、これを住宅建築にも拡張、「建本主義」を提唱する